

第14回「学ぶ土台づくり」推進連絡会議 事前提出資料 まとめ

※テーマ「幼児教育と小学校教育の接続」に関する取組等についての事前提出資料をまとめさせていただきました。

氏名	内容	
	現状(取組)	課題
(宮城県国公立幼稚園・こども園協議会副会長) 石井 敬子	<ul style="list-style-type: none"> ・「幼児教育の当面する課題に関する調査」集計から ①Q: 貴園では幼小連携を行っていますか? 「行っている」と回答した園: 100% (H29: 96%) ②Q: 行っていると回答した園では、どのような連携を行っていますか? イ 入学する園児(幼児)に引き継ぎ(申し送り): 100% ロ 幼児と児童が行事や活動に参加したり、見学したりする機会を設けている: 93% ハ 職員同士が互いに参観する機会を設けている: 77% ニ アプローチカリキュラム等の指導計画を作成し、実施している: 46% ホ その他: 18% 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流会では、小学校との日程調整、交流の移動手段に課題がある。 ・学区が広域のため交流できる学校が限られている。 ・打合せ時間の確保や実施した交流の反省や改善について話し合う時間が取れない。 ・就学児童の引き継ぎをしているが、相互の保育・教育内容の理解や現状の把握までに至っていない。 ・研修会の職員の参加が難しい(幼保一元化施設のため長時間児は通常保育) ・アプローチカリキュラム作成の手順などの方法が分からない。 ・小学校との連絡協議会など組織化すれば全体への理解も進むと思うが動き出せない。どちらからどのようにしていけばよいのか県教委からのアドバイスを頂きたい。 ・アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの共有のための時間と場の確保。
(宮城県私立幼稚園連合会常任理事) 吉岡 弘宗	<ul style="list-style-type: none"> ・接続の話をどこに課題として投げかけてよいか。 ・小学校長の考え方にも偏りがある。 ・進められたところも確かにある。 ・話し合いをスケジュール化できないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・宮城県教育委員会としてアプローチ・スタート・接続カリキュラムを1本にまとめてほしい。 ・現場的には、「10の姿」まで出てきて混乱している。
(宮城県保育協議会会長) 中鉢 義徳	<ul style="list-style-type: none"> ・8つのブロックの各市町村で、それぞれ保育・教育施設等と小学校との連携事業として取り組んでいる。保育・教育施設に通う子供たちが1日でも早く小学校の環境に馴染めるよう、未就学児童と小学校児童との交流や関係する教職員間の情報交換等を通じ円滑かつ適切な連携を図っている。 ①情報交換 ②小学校の先生の保育・教育施設訪問(5歳児の活動見学, 子供たちからの質問等) ③5歳児の小学校訪問(学校・学級見学等) 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所児童要録の改善 小学校において子供の育ちを支え、子供の理解を助けるものとなるような記録に改善していく。

氏名	内 容	
	現 状 (取 組)	課 題
(宮城県小学校長 会理事) 新山 祐子	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼保小連絡会 (大河原町) 年2回の研修を行っている。1回目は保育参観 (授業参観) による幼児・児童理解及び講話等の研修。2回目は入学に向けた情報交換。 ・ 就学に向けた家庭、地域との連携 (大河原町) 就学時健康診断の日に町の子育てサポーターを招き、話を聞いたり、ワークショップを開いたりして子育てについて考える機会を設けている。保護者にとっては、子育てをサポートしてくれる団体があることを知る機会にもなっている。 ・ スタートカリキュラムの作成 (大河原南小学校) 先進校の取組を参考に、4・5月の細かな授業予定表に加除修正を行い、より使いやすい様式を工夫している。年度末 (2月) を目標にしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スタートカリキュラムの作成 町立の保育所を含め、複数の幼稚園・保育所があり、幼児の経験・体験は様々である。各園・所からの情報収集とスタートカリキュラムへの生かし方が課題である。
(宮城県児童館・ 放課後児童クラブ 連絡協議会会長) 我妻 良恵	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童館では (全ての館の状況を把握してはいないが) 児童や保護者からの相談に乗っている。学校のことでも相談される。 ・ 地域によっては、関係機関が集まり情報を共有し、問題の解決法を探っているところもあるが、地域毎の差は大きいと感じている。 ・ 特に幼児と小学生の接続という視点では、見ていないと思われる。 	
(宮城県私立幼稚 園PTA連合会研 修部長) 田村 さや香	<ul style="list-style-type: none"> ・ 早寝・早起き・朝ごはんは意識的に取り組んでいる。 ・ ルルブルは学校から配られたシール表があったため、子供にとっての意識付けになっていたようである。 ・ 地域の祭りやイベントには子供と一緒に参加するようにしている。 ・ 小学校入学に向けて、家庭と地域との連携として子供会のお楽しみ会があるようだが、地区の人数が多いため、あまり意味が無いという声を聞いた。また、仕事を持つ保護者が多く、会の運営も負担が大きい。 ・ 図書館を定期的に利用し、本を読む機会を増やせるようにしている。寝る前は読み聞かせを習慣にしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子供には外で体を動かして遊べる機会を増やしたいと考え、出かけるようにしているが、近所の公園ではボール遊びが禁止されている。同年代の子があまり遊びに来ていない等、遊ばせづらい環境になっているように感じる。 ・ 幼保小接続カリキュラムとあるが、家庭において入学までに意識的に取り組むとよいことは、園からもアプローチがあるとよいのではないかと。また、保育内容においても各園で差が大きいので、統一したカリキュラムがあるのなら、知らせてほしい。 ・ 小学校の懇談会は家庭と学校、友人の親との交流でとても有意義であるが参加者が少ない (クラスの1/5程度)。

氏名	内容	
	現状(取組)	課題
(塩竈市教育委員会学校教育課参事兼課長) <small>とのおやま</small> <small>かつはる</small> 遠山 勝治	<p>・平成29年度から、市独自の小中一貫教育に取り組んでおり、その3本柱による取組の一つとして、塩竈市幼保小連携事業を実施している。</p> <p>【これまでの取組】</p> <p>①気軽に相談できる体制づくり 特別支援教育スーパーバイザーが市内の幼稚園・保育所・小学校等を巡回訪問 (小学校7, 私立幼稚園6, 市立保育所5, 私立保育所6の計24か所)</p> <p>②小学校生活への適応支援 幼稚園・保育所等で使用する「アプローチカリキュラム」と、小学校入学時に使用する「スタートカリキュラム」を市独自に作成・活用。 →小中一貫教育9年間のスタートに当たる「小学1年生の学習環境」を整える。</p> <p>【今後拡充する取組】</p> <p>①幼保小連携の体制づくり 幼稚園や保育所, 小学校等の縦横の連携を深めるための連絡協議会を設置。</p> <p>②教育や保育の質の向上 「共通の困り感」を持つ幼稚園・保育所・小学校等で合同研修会等を実施し、現場の教職員の資質・能力の向上を図る。</p>	<p>・小学校入学に係る適切な就学指導が難しい。</p> <p>①小1プロブレム対策 発達障害等、特別な配慮の必要な児童の就学指導が上手くいかず、そのまま通常学級に進学してしまう。</p>
(早寝早起き朝ごはん実行委員会in宮城会長) <small>おのおた</small> <small>まきひろ</small> 太田 昌浩	<p>・親子で早朝ゴミ拾いの実践 子供たちのゴミ拾い体験発表 疑似マナーをためて、景品プレゼント</p> <p>・講演会 村井知事子育てを語る 両親から受けた教えや、自身の子育てエピソードなど、一人の父親の視点でお話いただいた。県の子育て支援事業「ルルブル」の取組なども紹介された。(117名参加)</p>	<p>・委員会メンバーの勤務先異動や学生ボランティアの卒業などで参加者の定着・継続が難しい。新規会員募集と予算確保が今後の課題。</p>

氏名	内容	
	現状(取組)	課題
(宮城教育大学教育学部幼児教育講座幼小連携推進研究室室長) 佐藤 哲也	<ul style="list-style-type: none"> 宮城教育大学では「保幼小連携教育論」(後期・金曜日・4限)を開講している。また、教員免許更新講習会でも「発達と学びの連続性」をテーマにした全10時間の選択科目を開講して好評を博している。宮城県下の養成校(専門学校, 短期大学, 4年制大学, 大学院)でも, こうした取り組みが行われているか, 県教委として把握してもよいかと考える。 また, 宮城県国公立幼稚園・こども園連合会, 宮城県私立幼稚園連合会等をはじめ, 保育所等の連合組織等を対象に, 幼保小連携に関わる研修会や実践研究の取り組みに関する調査を行う必要もある。組織を動かす方策を考えていく上で, 必要なデータとなるはず。 養成校や保育者団体と行政との連携(繋がり)を作っていく努力が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々なチャンネルから啓発活動を展開する(パンフレットやリーフレット等の配付)一方で, 実践に携わる保育士・幼稚園教諭・保育教諭と小学校教諭との交流機会を作ることが大切だと考える。シフト制, 預かり保育, 小学校教諭の超多忙化等々, 様々な理由で合同研修機会の確保が非常に難しくなっている。それ故, 行政がリーダーシップを発揮(予算的裏付け有り)しなければ, 合同研修会・セミナーの実施は難しい。 秋田県や福井県のように, 幼児教育センターを設立して幼保小連携のイニシアティブを取っていくことも, 検討する必要がある。 私学・私立の多様性や保育所の独自性を尊重しながらも, 互いに集い語り合う機会のさらなる活性化が必要。単に講演に耳を傾けるだけの研修ではなく, 教育・保育実践を通じて(公開保育, 保育実践を持ち寄ってのグループワーク等), 保幼小連携について学び合う機会を作っていくことが不可欠。 そうした努力と成果を積み上げること, 地に足のついた接続期カリキュラムが出来上がるのだと思う。
(仙台市子供未来局幼稚園・保育部運営支援課主幹) 田中 真由美	<ul style="list-style-type: none"> 連携の推進の一環として, 小学校への円滑な移行のために子供の育ちについての理解を共有する観点から, 保育要録や指導要録を活用し, 子供の姿を伝えている。今年度の新指針, 新要領等の施行に伴い幼児期に終わりまでに育ってほしい姿を取り込んだ様式への移行を進めている。また, 幼保小連絡会においては共通の様式を用いて引継ぎ等を行い相互理解に取り組んでいる。 仙台市では, 公立保育所のアプローチカリキュラムの基本形を作成し, 各保育所でその活用を始めるとともに, 私立保育園等にも参考送付している。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児教育と小学校教育との接続については, 送る側・受ける側それぞれの場での, 子供の育ちを踏まえながらの取組は充実してきているものの, 接続期の連携や交流等の取組に関しては, 各地域・学校区等で違いがある。効果的な事例の共有等を図りながら, 進めていくことが望まれる。